

色彩表現におけるメトニミーとシネクドキの統合

(The Integration of Metonymy and Synecdoche in Color Terms)

染 谷 聡

1. 目的

本論は従来の先行研究を検討しながら、提喩 (synecdoche) 及び換喩 (metonymy) を区別する時に次のように定義する。(1) シネクドキは「AはBの一種である」という公式が当てはまる。(2) メトニミーは「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。この定義に基づいて、次の点を明らかにする。(3) 色彩表現に関しては、シネクドキとメトニミーは統合される。対象言語をフランス語、日本語とし、両言語の相違点や共通点も観察しながら (1), (2), 及び (3) を示す。

2. 先行研究の検討

ここでは、第一に伝統的なシネクドキとメトニミーの定義について先行研究を概観し、整理し、問題点を指摘する。第二に、「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキ、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと捉える本論の基本的立場を示す。

第一に、Dumarsaisの定義と分類を取り上げる。これは佐藤 (1978) の中で、シネクドキとメトニミーの説明に使われたものである。佐藤の説明によると、Dumarsais (1729-1730) はシネクドキをメトニミーの一種と見なした上で、両者を次のように区別する。シネクドキ=二つの物事が互いに含有-非含有という内部的関係によって名前の貸し借りをを行うもの。メトニミー=外部的な隣接性か親近性によって名前の貸し借りをを行うもの。デュマルセはシネクドキを4種類に、メトニミーを8種類に分類している。事例は佐藤のもの。シネクドキ：＜類による＞-人間たちという代わりに「やがて死すべき者」、＜種による＞-性悪な人間を「盗人」と呼ぶ、＜数による＞-複数の代わりに単数、＜全体-部分による、部分-全体による＞-「頭」によって人間全体を意味。メトニミー：＜原因によって結果＞-文章を書くという結果を意味して「筆を執る」、＜結果によって原因＞-悲しみという原因を「涙」で表す、＜容器によって内容＞-酒を「銚子」、＜産地で産物＞-「九谷」によって九谷焼き、＜記号によって物事＞-「黒帯」で有段者、＜抽象名によって具体物＞-「稼ぎ」によって金銭、＜身体部分で感情＞-「腹が立つ」によって怒り、＜人の名称によって建物や組織＞-「フォード」で自動車。以上がデュマルセの定義と分類である。

デュマルセの定義について、シネクドキとメトニミーの区別が曖昧である。シネクドキの「含有-非含有という内部的関係」は、「銚子」で酒を表す＜容器によって内容＞のメトニミーにも当てはま

る。銚子という容器は酒という内容物を含む。酒は銚子に含まれている。このように、「含有－非含有」というシネクドキの定義はメトニミーの例にも当てはまってしまう。シネクドキの定義として不十分である。一方、メトニミーの「外部的な隣接性か親近性」は、「頭」によって人間全体を意味する＜部分－全体＞のシネクドキにも当てはまる。頭は人間の体と外部的に隣接している。結果として、「外部的な隣接性か親近性」というメトニミーの定義はシネクドキの例にも適用できてしまう。メトニミーの定義として不備がある。

本論では、「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義する。この観点からデュマルセの分類を検証する。第一にシネクドキの分類。人間は死すべきものの一種、盗人は人間の一種であるが、頭は人間の一種ではない。「頭」によって人間全体を意味するものは「AはBの一種である」という公式が当てはまらないので、本論ではメトニミーに含める。第二にメトニミーの分類。稼ぎという抽象名詞は「点数稼ぎ」のような例にも使われる。つまり、点数も金も稼ぎの一種と捉えられる。稼ぎによって金銭を表すのは「AはBの一種である」という公式が当てはまるので、本論ではシネクドキに含める。デュマルセはシネクドキを4種類に、メトニミーを8種類に分類したが、それらは統一性を欠くものである。もっと簡単に、「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義する方が明確だと考えられる。

第二の先行研究として *Groupe μ* に触れる。*Groupe μ* ; J. Dubois *et al* (1970) はシネクドキを比喻の中心に位置付け、次のように説明する。シネクドキはAとBの部分－全体の関係である。ある一つの全体をいくつもの部分に分解して理解する様式には異なる二つのやり方がある。その分解法をII様式と Σ 様式と名づける。例えば、木(樹木)を一つの全体と見て、それを両様式に基づいて二通りに分解し、部分に分ける。II様式：木＝枝、葉、幹、根…。これは現実的な一本の樹木全体の分解であり、その木全体はばらばらに分けられた各部分の「積」である。 Σ 様式：木＝ポプラ、柏、柳、樺…。一つ一つは排他的だが、類と種による集合的な包含関係によって、それらの要素は互いに論理的な「和」の関係を作っている。*Groupe μ* はこのように説明する。

これは分かり易い分類である。しかし、*Groupe μ* はメトニミーを隣接性と捉える。この隣接とは空間的、時間的、あるいは因果関係を示すものだと言う。*Groupe μ* はメトニミーをシネクドキのII様式に含めてしまっている。彼らは例として、*Prenez votre Cesar*. (諸君のカエサルを取りなさい) を分析する。これは教師が生徒に「ガリア戦記」の勉強をするように促した文である。仲介となるのは、この有名な執政官の生涯、その著作、戦争、彼の時代、彼の都市などを包括する「時空的全体性」である。この全体性の中で、ユリウスとその著書は隣接している。このように説明される。

Groupe μ はシネクドキをII様式と Σ 様式の二つに分けることによって、部分と全体の関係を明確に説明した。しかし、メトニミーをシネクドキのII様式に含めた結果、メトニミーとシネクドキの区別は曖昧のままである。本論では、「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクド

きと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義する。この観点からは、Groupe μ がシネクドキと定義するII様式（木＝枝，葉，幹，根...）はメトニミーに分類される。なぜなら，枝，葉，幹，根は木の一部であるが，木の一種ではないからである。II様式は「AはBの一種である」という公式が適用できない。一方， Σ 様式（木＝ポプラ，柏，柳，樺...）は本論の定義でもシネクドキに分類される。理由は，ポプラ，柏，柳，樺は木の一種だからである。 Σ 様式は「AはBの一種である」という公式が当てはまる。Groupe μ がメトニミーに分類する隣接性の一例である *Prenez votre César*.（諸君のカエサルを取りなさい）は，本論の定義でもメトニミーに分類できる。なぜなら，ガリア戦記はCésarの生涯，その著作，戦争，彼の時代，彼の都市などを包括する「時空的全体性」に隣接しているが，Césarの一種ではないからである。これには「AはBの一種である」という公式が適用できない。結果として，Groupe μ のメトニミー及びシネクドキの区別は曖昧であるが，「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し，「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義することによって両者の定義が明確になった。同時に，Groupe μ の分類を新たに解釈することができる。

3. シネクドキとメトニミーの統合

本論の定義では（1）シネクドキは「AはBの一種である」という公式が当てはまる。（2）メトニミーは，「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。しかし，色彩に関するシネクドキの表現の背後にはメトニミーが組み込まれていると考えられる。ここでは，色彩表現をシネクドキとメトニミーの統合という観点から考察する。

佐藤（1978）は「雪」を例に挙げ，次のように説明する。雪は様々な白い存在物の一種である。雪を白いものの「外延的意味」と定義する。一方，白さは雪の持つ様々な特性（白さ，冷たさ，空から降る，地上に積もる...）の一つである。白さを雪の「内包的意味」と定義する。色の白い女の子を「白雪」と喩える場合，外延的に見ると白い肌は白いものの外延に含まれる。その結果，「肌の色が白い女の子→白いもの」によって一般化のシネクドキが可能と捉える。次に，内包的に見ると白さの内包は雪の内包に含まれる。結果的に，「白いもの→雪」で特殊化のシネクドキが可能となると捉える。

確かに，色の白さが「白いもの」に意味論的に派生するのは一般化のシネクドキと捉えることができる。なぜなら，色の白い女の子は白いものの一種であるからである。本論のシネクドキの定義である「AはBの一種である」という公式が当てはまる。しかし，「肌の色が白い女の子→色が白い女の子」という特徴は現実世界に存在する女の子の特徴の一部である。女の子全体が白いのではなく，髪が黒いとか，着ている服が赤ということもあり得る。肌の白さに焦点が置かれたわけである。これは「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。結果として，メトニミーの定義に当てはまる。また，この点だけを見ると，本論の定義ではメトニミーに分類したGroupe μ のII様式と同一である。つまり，この例では色の白さが「白いもの」に意味論的に派生し，「AはBの一種である」という公式が当てはまる一般化のシネクドキのプロセスと，肌の白さという現実世界に存在する女の子の特徴

の一部(髪は黒、着ている服は赤)で女の子全体を表し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないメトニミーが相互に関連している。結果的に、次の図式が成立する。

肌の色が白い女の子→(メトニミー) 色の白い女の子→(一般化のシネクドキ)→白いもの→
(特殊化のシネクドキ)→雪

このことから、色彩表現においてはシネクドキとメトニミーは統合できる。

佐藤(1978)は「外延的に全体を表す類概念をもって種を表現し、あるいは、外延的に部分を表す種概念によって類全体を表現する言葉の綾」をシネクドキと捉える。逆にメトニミーを「現実的な共存性に基づく比喩」と捉え、シネクドキとは対立すべきだと主張する。しかし、上の説明からシネクドキはメトニミーと重なり合うことが分かる。

佐藤(1978, 1981)に見られるように、伝統的にシネクドキとメトニミーは区別されてきた。比較的新しい研究でも同様である。瀬戸(1997)は「メトニミーとは現実世界の物と物(entity)との間で一方から他方へ指示がずれる現象を言い、シネクドキとはより大きなカテゴリー(category)とより小さなカテゴリーとの間の包摂関係に基づく意味的伸縮関係を言う」と指摘する。シネクドキとメトニミーは全く別物であり両者の融合はあり得ないと捉える(瀬戸1997, Seto 1999)。その根底にあるのは、現実世界の隣接性に基づくメトニミーと、カテゴリーの意味論的な拡大・縮小に基づくシネクドキの違いである。

本論では、シネクドキとメトニミーの区別を明確にするために、定義をもっと単純化する。「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義する。しかし、色彩表現においては、瀬戸が主張するようにシネクドキとメトニミーの融合はあり得ないなどとは言えないことが「白雪」の例から分かる。

4. 事例研究

本論では、「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義してきた。しかし、色彩に関するシネクドキの表現の背後にはメトニミーが組み込まれるという捉え方を3で示した。ここでは、シネクドキとメトニミーの統合という観点から、さらなる色彩表現の例を挙げて示す。

(1) Les raisins [Ils] sont trop vert. (そのブドウ[それ]は青すぎる→欲しいものが手に入らなかったときの負け惜しみ)

(1) はラ・フォンテーヌ Fables の中に出る一文である。キツネがブドウを取ろうとしたが、取

れなかったので「あんなブドウは青すぎる（酸っぱい）」と負け惜しみを言った話である。この表現は慣用化され、他の例にも使われる。第一に、これを「出来事」の観点から考察する。フランス語「vert, verte = 緑色の」という意味から、緑色のブドウが存在する。「緑色のブドウの存在」、「それを見て取ろうとする」「取れなくて負け惜しむ」という三つの現象は同じ状況にある。この状況での負け惜しみはブドウの存在と関係がある。緑色のブドウと負け惜しみとの間には因果関係が成立する。だとすると、緑色のブドウは負け惜しみの一種ではない。「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。「出来事」の観点からは、「緑色のブドウ→負け惜しみ」の関係はメトニミーであって、シネクドキではない。第二に、(1)は「負け惜しみ」の表現として他にも使われる。その場合、欲しいものが手に入らなかった時の負け惜しみがブドウとは限らない。金であるかもしれないし、地位であるかもしれない。集合体としての負け惜しみの経験には多くの種類がある。「経験的集合体」の観点からは、緑色のブドウは人の負け惜しみの経験から導き出された一種である。ここでは「AはBの一種である」という公式が当てはまる。この観点からは、緑色のブドウと負け惜しみの関係はシネクドキである。結果として、(1)は「出来事」としてのメトニミーと「経験的集合体」としてのシネクドキの結合体である。「出来事」と「経験的集合体」という二つの観点から捉えると、メトニミーとシネクドキは別々ではない。

(2) vin vert... (未成熟の酸味があるワイン)

(2)は文字通りには「緑のワイン」である。実際には、ワインそのものが緑色でもなく、ボトルが緑色でもない。「経験的集合体」としての緑のものには、実が十分に熟れてない果物も含まれる。フランス語には、melon un peu vert (まだよく熟れてないメロン) という例が存在する。「経験的集合体」の観点からは、未成熟なものは緑のものの一種である。(2)では「未成熟なもの」と「vert」との間に「AはBの一種である」という公式が当てはまり、シネクドキの関係が成立する。一方、「出来事」の観点から分析すると、熟れてない物が緑色をしている状況が現実にある。melon un peu vertはその一例である。この場面では、緑は未成熟のメロンの一種ではない。「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。「緑→熟れてない」の関係はメトニミーである。つまり、(2)の表現は単独のシネクドキでもないし、単独のメトニミーでもない。背景的知識の総体としてのシネクドキと現実の状況的メトニミーが相互に組み合わせあって成立している表現である。

(3) ...Je ne suis pas un naïf ni un béjaune. (私は世間知らずではないし、青二才でもない。)

(R. QUENEAU, les Derniers Jours, p. 230.)

(3)はbec jaune (黄色い嘴→青二才, ひよこ)のcが落ちた形である。jaune = 黄色いの意味から、ひよこの黄色い嘴が未熟者へと意味派生した例である。一見、「黄色い嘴→青二才」という単純

な拡張と考えられるが、実際はもっと複雑である。黄色い嘴は雛全体の特徴ではなく、嘴の部分の特徴である。体の他の部分は嘴と同じ黄色ではない。黄色い嘴は雛の一種ではない。「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。「黄色い嘴」と「雛」との関係はメトニミーであって、シネクドキではない。一方、黄色い嘴をした雛は抵抗力が弱く、自立できないという特徴を持っている。ここに焦点を当てると、黄色い嘴をした雛は未熟なものの集合体に含まれる。雛は未熟なものの一種である。「AはBの一種である」という公式が当てはまる。雛と未熟なものとの関係はシネクドキである。つまり、(3)は黄色い嘴で雛全体を指すメトニミーと、雛で未熟なものの総体を指すシネクドキが融合している。さらに、未熟なものの総体からjeへと特殊化している。(3)で興味深いのは、日本語の「黄色い嘴」という表現がフランス語と逐語的に対応する点である。ただし、フランス語の *béjaune* 及び *bec jaune* には日本語のように「生意気な」というニュアンスはない。フランス語の方は「幼い、ひよこ」という意味しかない。

(4) Son frère, *blanc-bec* boutonneux qui affectait un chic anglais, lança d'une voix perchée...

(彼の兄は、ニキビ面の生意気な青二才でシャレた英語を装い、お高くとまった声を出した。)

(Patrick MODIANO, *les Boulevards de ceinture*, p. 78-79)

(4)の *blanc-bec* は文字通りには「白い口」である。(3)の黄色い嘴はひよこだが、白い口はまだひげの生えない若い男がモデルになっている。ここで言う若い男とは無抵抗な幼児ではなく、ある程度口も達者で、洋服にも気を配る位の年齢だが、まだ半人前の青二才を指す。髭の生えない白い口元は若い男全体の特徴ではなく、口元の特徴である。髪は黒いかもしれないし、あるいは金髪かもしれない。目は青く、頬は赤いかもしれない。白い口は若い男の一種ではなく、白い口で若い男全体を表している。「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。「白い口」と「若い男」の関係はメトニミーであって、シネクドキではない。しかし、髭の生えない白い口元をした若い男は生意気盛りという特徴を持っている。白い口元の「若い」男は生意気さという抽象的集合体に含まれる。若い男は生意気なもの一種である。「AはBの一種である」という公式が成り立つ。若い男と生意気さとの関係はシネクドキである。このように(4)では、白い口で若い男全体を表すメトニミーと、生意気なものに若い男が含まれるシネクドキは統合される。

(5) Coquin, depuis que ta femme est morte, je m'aperçois que tu *te grise* tous les jours...

(ろくでなし、君の奥さんが亡くなってから、君は毎日「憂さ晴らしに」飲んで酔っていることに僕は気づいているよ。)

(CHAMFORT, *Dialogues, Époux inconsolable.*)

まず、*gris* は「灰色」の意味から、*Il fait gris*. (空が曇っている) のように、空を灰色に捉えて使

われる。曇っている場面にいる人は、見通しが悪い。「曇る→見通しが悪い」を一つの出来事と捉え、と、「曇り」に焦点が置かれる。「出来事」の観点から見ると、「曇る」と「見通しが悪い」という二つの出来事が時間的にほぼ同時に生じることになる。曇りは見通しが悪い出来事との時間的因果関係を述べている。この観点からは、曇りは見通しが悪いことの一種ではない。「AはBの一種である」という公式が当てはまらない。「曇る→見通しが悪い」の関係はメトニミーであって、シネクドキではない。一方、見通しの悪さという経験的集合体には酔った状況も含まれる。「酔う」ことは「見通しの悪さ」という抽象的集合体の一種である。この点「AはBの一種である」という公式が当てはまる。「酔う」と「見通しが悪い」の関係はシネクドキである。もちろん、見通しが悪いから酔うのではなく、酔うから注意力が弱りよく物事が見えないので、「酔う→見通しが悪い」を一つの出来事と捉えることもできる。これを一つの状況と捉えれば、「酔う→見通しが悪い」の関係はメトニミーである。いずれにしても、「出来事」としてのメトニミーと「経験的集合体」としてのシネクドキは別々ではなく、統合できる。

5. 考察

本論では、先行研究を概観しながら「AはBの一種である」という公式が当てはまるものをシネクドキと定義し、「AはBの一種である」という公式が当てはまらないものをメトニミーと定義してきた。メトニミーとシネクドキは伝統的にも、新しい説でも明確に区別されてきたが、色彩に関してはメトニミーとシネクドキは統合できることを示した。今後の課題として、メトニミーとシネクドキが統合できるのは色彩以外にどのようなものがあるかを究明する必要がある。例えば「筆箱」「下駄箱」などの例では、元々メトニミー表現であった。しかし、現在では「筆」から書き物全般（シャープペン、ボールペン）へ、「下駄」から履物全般（靴、ハイヒール）へカテゴリーが拡張されている。このように捉えると、これらの例でもメトニミーとシネクドキが統合できるわけである。色彩以外に、どのようなものがメトニミーとシネクドキの統合を主張できるか、体系的に論じる必要があると考えられる。

References

- 赤池鉄士. 1981. 『英語色彩の文化誌』研究社.
- Berlin, Brent and Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms* Berkeley: University of California Press.
- Groupe μ ; J. Dubois et al. 1970. *Rhétorique Générale*. Paris: Editions du Seuil.
- 伊東孝. 1994. 『色の不思議』雄鶏社.
- Meyer, Bernard. 1993. *Synecdoques: Étude d'une Figure de Rhétorique. Tome 1; Université de la Reunion, Faculté des Lettres et des Sciences Humaines; Publications du Centre de Recherches Littéraires et Historiques de l'Université de la Reunion*, Paris: Éditions L'Harmattan.
- 初山洋介. 2002. 『認知意味論のしくみ』町田健（編）シリーズ・日本語のしくみをさぐる－5. 研究社.
- Radden, Günter and Zoltán Kövecses. 1999. "Toward the Theory of Metonymy." In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought*, 17-59. Amsterdam: J. Benjamins.

- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』（学術文庫 1992年）講談社.
- 佐藤信夫. 1981. 『レトリック認識』（学術文庫 1992年）講談社.
- 瀬戸賢一. 1997. 「意味のレトリック」 中右実（編）『文化と発想とレトリック』研究社. 93-177
- Seto, Ken'ichi. 1999. 'Distinguishing Metonymy from Synecdoche.' In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought*, 91-135. Amsterdam: J. Benjamins.
- 須賀川誠三. 1999. 『英語色彩語の意味と比喩：歴史的研究』成美堂.